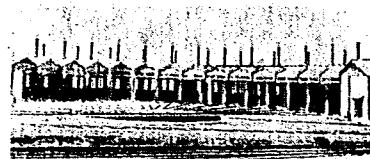


大正夜話



(大正初期の新津機関庫)

I 鉄道の町より

大正九年正月三日の新潟新聞を見るところ、その新津支局員が「わが地方の誇り」という見出しで次のように記している。

が、この文を熟読してみると、新津油田も既に枯済期に向かっていたことが知られる。

「原油……油成金と鉄成金、新津は何と言つても石油である。街道には豆殻を乾したり、麦をひろげたりしてあつた半農村の新津が僅々十数年の間に戸数三千、人口一万六千人寄留五千の推しも押されぬこの二等地今は二尋なる」となつたのは石油のためである。

柄日本から金津、小口方面に林立してゐる彼の櫓は雄弁に新津町の発達史を語